

## 幼き命を守るために、今、私たちにできることを

母はなぜ、幼いふたりをマンションの一室に閉じ込めたのか。飢え、渇き、絶望…、灼熱地獄のなかで、幼い命は消えていった。

・・・真実の事件をモチーフにして著された本書を、みなさまとともに・・・



つみびと

2019年 中央公論新社

山田 詠美 (著)

[1200-2]



物語を語る「登場人物」

- ・琴音 44歳 蓮音の母であり、桃太と萌音の祖母
  - ・蓮音 23歳 二人の子を置き去りにした母
  - ・小さき者たち
- 蓮音の子、桃太（モモと呼ばれている）4歳と、もうすぐ3歳の萌音（モネと呼ばれている）

私の娘は幼い子らを置き去りにして遊び呆け、一滴の水、ひとかけらの食べ物も無い室内で死なせてしまった。鬼母という言葉はこの娘のためにあるということに多くの人はずなずいているだろう…。物語は「母」の語りから始まり「娘」の語りへと続いていく。

## 「母・琴音」

子らを捨てて家を出てしまった自分と、子どもたちと共に生きる道を選んで、二人の子を死に至らせた娘。逃げてしまった自分からは生き抜き、一人で育てようと思った娘の子どもたちは死んでしまった。なぜ？

琴音は暴力を繰り返す父と、暴力に耐える母を見続ける家庭で育った。暴力が日常化した日々の、育児に無気力な母の下での屈辱的な小学生時代。着ている服は垢じみてパンツには穴が開き、足の付け根のゴムは切れたままだった。パンツに穴が開いていることをはやし立てた級友の声は大人になってからも何度も甦ってくる。父が死んだ後、妻子ある者の妾になって生きた母。

義父となったその人は琴音への性的虐待を繰り返した。生きるために声を上げることもできなかった少女時代。心はくずれた。そして結婚。蓮音が生まれ弟妹が生まれるも、日々の営みは精神を病ませ、子らを捨て、夫を捨てて現実から逃げてしまった。

## 「娘・蓮音」

家族を捨てた母の代わりに家事全般を押し付けられた小学校低学年の蓮音。小さな肩にのしかかる、幼い「弟・雄太」と「妹・彩花」の世話も過酷なものであり、誰にも助けてもらえない環境のなかで、がんばって、がんばり抜いて生きていく。

そして結婚。二人の子どもを授かり、誰よりも幸せに暮らしているはずなのに、いつの間にかに生じてくる心の軋み。

日々遊びに逃避していく蓮音に、ついに離婚がつつきつけられる。夫とその家族は「あの母から続いている『血』故に」と、子どもたちを引き取ろうとはしなかった。蓮音は子どもたちと共に生き抜く決心をする。二人の子を育てるために夜の店を転々としながら「こんなはずではなかった」と次第に焦燥を募らせていく。そして、自らの快樂を求めて、マンションの一室に幼い我が子二人を閉じ込め、置き去りにしてしまった。「モモとモネとママは運命共同体だよ」と、三人で歩み始めたあの日に戻ることは、もう、ない。

## 「小さき者たち」

飢えと渇きの中での桃太の心が語られます。

桃太郎の絵本を読んできたママ。「モモの名まえは『桃太郎のお話』から、モネの名まえは『モネの睡蓮』からつけたんだよ。二人は宝物だよ」と、ぎゅっと抱きしめてくれたママ。でもモモたちを置いて出かけるようになって、だんだん帰ってこなくなったんだ。リビングとバスルームを閉ざして大きな鍵をかけて、インターフォンも切って、ママはいなくなってしまった。お水、どこにもないよ。お菓子もないよ。「ママ、僕たちをずっと飼ってください」とデパートの屋上でお願いしたあの時、「飼うんじゃないよ。育てるんだよ」と言ってくれたのに、もうお荷物になってしまったんだね。モネは動かなくなったよ。そうだ、こんな時は、ママが歌っていた歌を歌おう、「上を向いて歩こう」だ。薄れる意識のなかでモモに見えてきたのは、どんぶらこどんぶらこの「もも太郎の絵本」？冷たく清んだモネのあの美しい池？冷たいアイスクリーム？蛇口から出てくるお水？やさしかったママの顔？

…暑かったね。お腹すいたね。いっぱいがんばったんだね。今、天使が迎えにきて、そっと抱き上げてくれたんだね…。

表紙に描かれた「SINNERS」。つみびとの英単語「複数形」に託された言葉の意味を、心に刻む。(みっと)